

編集後記

＜高木 国夫＞

近年胃癌の早期診断の進歩と共に、胃癌の術後長期生存例が増加して、術後5年以後の生存例におこる再発例に関心が向けられてきている。胃癌研究会で胃癌術後5年以後の再発がとりあげられ、時宜に適した問題として本誌で特集を試みた次第である。

岩本、岩永らによる外科臨床の立場からの報告、遠城寺らによる組織像の推移が病理面からとりあげられた。また、5年以後の再発例についてのアンケートの集計がまとめられている。

そして胃癌術後10年以後の再発例が報告されている。術後5年以後の再発例には、早期癌ないしpmに止まる準早期癌ともいえるものが多いことが1つの特徴であった。5年ないし10年以前には、早期胃癌の把握が不十分であって、残胃癌遺残による再発がみとめられ、この再発に関して、再切除の可能性が古沢らにより報告された。また、座談会でもこの点がとりあげられて、早期胃癌の診断、治療の上からも十分反省すべき問題点であろう。

症例報告の中で、飯田らによる報告は、大腸ポリポージスは、単に大腸のみでなく、胃と共に、十二指腸、小腸にも関連した疾患で、大腸ポリポージスの概念を消化管全体にひろめる必要性を、1例1例の詳細な検討により報告している点に、感銘したことを附記する。

＜編集＞ 早期胃癌研究会